

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第116号

イザヤ 65:1

平成17年5月27日

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ私たちはあなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがこれらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども、わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにもたずねてくれなかった。』そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話しなかったのでしょうか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。』
マタイ 25 : 31 - 46.

キリストによる裁き（神の永遠の裁き）の二つ目に展開する光景は、2.「栄光の位」（マタイ 25 : 31）での裁きです。まず、真の「キリストの証し人たちが報酬に与る裁きを1.「キリストのさばきの座」で受けた直後、大患難期の最後、キリストの再臨のとき、今度はキリストを信じなかった世界中の者たちがキリストの前で裁かれることとなります。キリストによる裁きの対象はクリスチャン以外の者たちと思いついてクリスチャンは意外と多いようですが、先回学んだようにそうではなく、クリスチャン対象の『報酬に与る裁き』の後ここに到って初めて、神の裁きはイエス・キリストを救い主と受け入れなかった者たちに向けられるのです。裁きの基準はこの世において神の民ユダヤ人をどのように処遇したかに置かれます（以下考察するように、ユダヤ人に対してだけでなく、クリスチャンに対する処遇も裁きの基準に含まれるとするのが大方の解釈です）。

冒頭に引用したマタイの福音書 25 章に記されている出来事は、未信者（イエスを、自分の罪を贖い、永遠の命を与えてくださる「救い主」として受け入れなかった者）への裁きを鮮やかに描いています。このくだりはイエスの語られた『たとえ』としてよく言及されますが、実際には、諸国の民の神による選り分けを、羊飼いが羊と山羊とに分けること、すなわち、全く異質のグループに分けることになぞらえた裁きの預言といえます。ヘブル語聖書では、象徴的に「羊飼ひ」（牧者）は神、「羊」は神の民、「山羊」は罪、罪人を象徴することから、異邦人として用いられていますから、そのまま応用すれば、「人の子が栄光を帯びて来られるとき、すなわち、『主の再臨』のときの裁きの光景であることが分かります。この時、「羊」として神に受け入れられキリストの右に置かれる者たち「父に祝福された人たち」は、「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継（ぐ）」、すなわち、イエス・キリストによる千年支配の『神の国』に入ることが許されます。他方、「山羊」とみなされ、栄光の王として再臨されたキリストの左に置かれる者たちは、「のろわれた者ども」で、「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火」、すなわち、「火と硫黄との池」地獄に投げ込まれる判決が宣告されるのです。羊は、「永遠のいのち」への道、山羊は「永遠の刑罰」への道へと、キリストが再臨される時点で完全に方向づけられることとなりますが、後者のグループに振り分けられた者たちが現実に、「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」ところ『地獄』に投げ込まれるのは、キリストの地上での千年支配が終わった後であることがヨハネの黙示録から窺えます（黙示録 20 : 10-15）。本来、人のためではなく、神に反逆した死なない天界の被造物、サタンをかしらとする随天使や悪霊どものために用意された『地獄』に神の似姿に造られた人が投げ入れられるということが神の御旨では決してないことから、父なる神の御心に通じておられたイエスご自身言及されたように（マタイ 18）、聖書の語るサタン、獣（反キリスト）、偽預言者とともに永遠に苦しみを受ける場所『地獄』が如何に恐ろしいところであるかは、想像を絶するものがあります。

そのとき地上に生きているユダヤ人、クリスチャンを除く諸国民に下されるこの裁きは、働き、すなわち、地上における各自の言動に応じて下されることとなります。「羊」とみなされた者たちの働きとは、キリストの言葉を用いるなら、彼らが「わたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひ

とりにした」ことが、キリスト自身にしたこととして快く受け入れられたということであり、「山羊」とみなされた者たちの働きとは、彼らの言動がキリストに反逆するものとして受け取られたということなのです。そこで、この預言的メッセージを、イエスが語られてからほぼ二千年経った今日、『主の再臨』の出来事の成就を待っている終末の最後の時代に生きる全世界の者たちに対する警告として受け止めるなら、「わたしの兄弟たち」がだれを指すのかは未信者の生死を決定する重大な鍵になってきます。ヘブル語聖書では、預言者ヨエルが、メシアの再臨のときに起こる裁きを次のように預言しています。「見よ。わたしがユダとエルサレムの捕われ人を返す、その日、その時、わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシヤパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。」(ヨエル3:1-2)。ヨエルによれば、神は全地に散らされている神の民「ユダとエルサレムの捕われ人」をまず彼らに与えられた嗣業の地、聖地に連れ戻されます。それから、諸国民が集められ、『神が裁く』という意味のエルサレムに近い「ヨシヤパテ」の谷、あるいは「さばきの谷」で、イスラエルに敵対した諸国民が裁きの宣告を受けるのです。

したがって、イエスの言われた「わたしの兄弟たち」が、イエスの同胞ユダヤ人を指すことは間違いありませんが、イエスの他の教えから、キリストの証し人クリスチャンも含まれるとみなすことができます。イエスはある時、この世の常識を超えて、血縁関係にあるという理由だけで母マリヤとご自分の異父兄弟たちを「わたしの母」「わたしの兄弟たち」とみなすことをなさらないで、手を弟子たちの方に差し伸べて「見なさい。．．天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」と教えられました(マタイ12:48-50、下線付加)。また、ヘブル人への手紙の著者は、詩篇22篇を引用して、イエスは弟子たちを「兄弟と呼ぶことを恥としないで。．．わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」と言われると、現在形で、甦られた贖い主イエスと弟子たちとの関係が『兄弟関係』であることを描いていますが(ヘブル人2:11-13)、甦られた直後のイエスご自身のお言葉にもそのことは反映されているのです。甦りのイエスが、埋葬を完成させようと墓に来ていたマグダラのマリヤや他のマリヤたちに語りかけられたお言葉は、「．．わたしの兄弟たちのところに行つて。．．告げなさい」でしたが、彼女たちが実際『イエスの甦りの事実』を告げた相手はイエスの弟子たちであったことを、福音書の著者マタイもヨハネも記録しているのです。キリストを信じる者たちはすべて、「わたしの兄弟たち」であることを甦られた主は明らかにされたのでした。

また、キリストの弟子の最も小さい者たちに対するどのような愛の行為であっても、キリストに覚えられ、受け入れられるということは、言い換えれば、キリストの弟子、すなわち、キリストの証し人(キリストを公に認める者)はこの世にあって、この世の評価ではどんなに小さなつまらない者であっても、キリストがご自分と同一であるかのように扱ってくださる、キリストのかけがえのない兄弟であるということなのです。「わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」と約束されたキリストはさらに、「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということを受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。私の弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。」(マタイ10:40-42)と、イエスの直弟子たちに対してだけではなく、初代教会に始まって全地に遣わされていく後世のキリストのすべての証し人にも大きな約束をしてくださったのでした。また同時に、この世がユダヤ人、クリスチャンを迫害する「大きな患難」のときに、キリストの兄弟たちを憐れみ、愛の心で労わる者にはやがて地上に実現する『神の国』に導き入れられるという報いが約束されたのでした。キリストの再臨のときが近づいている今日、この警告にすべての異邦人が耳を傾けることを主は望んでおられるのです。

聖書では、人類を人種、民族、国籍によってではなく、神との関係で三つのグループに分けています。まず、1. 神の民イスラエル(古代ヘブル人、今日のユダヤ人)、すなわち、イスラエルの族長、父祖アブラハムへの神の約束の成就を未だ待ち望んでいる、神ヤーウエとの契約関係にある民、2. キリストを信じる信仰によってキリストとの密接な関係に置かれ、神から霊のイスラエルとみなされているクリスチャン、そして、3. 神ヤーウエも、御子キリストも信じない諸国民、です。神の民イスラエル以外はすべて異邦人と呼ばれていますが、イスラエルは、『神ヤーウエの証し人』として数多くある諸民族の中から選り分けられたにもかかわらず、神に反逆し、御旨から遠く離れてしまったため、異邦人による攻撃、迫害、圧制に苦しめられ、このような形で、人間史の中で神によって裁かれてきたのでした。神のイスラエルに対する懲らしめは今も続いています。しかし、出エジプト後、四十年間荒野をさまざめたイスラエルの民が、約束の地カナン(今日パレスチナと呼ばれている)にいよいよ入ることを許されたとき、神が、「あなた(イスラエル)が彼らの地(カナン)を所有することのできるのには、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。それは、これらの国々が悪いために、あなたの神、主があなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。また、主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになさった誓いを果たすためである。」(申命記9:5、下線付加)と言われたように、イスラエルを取り巻く国々の悪が満ちたとき神が御介入され、イエス・キリストが支配される『神の国』がこの地上に実現することになるのです。